報 告

看護実践能力を高めるための看護学科教育課程における概念枠みの検討（第１報）

中馬　成子*　　布花原　明子**

<要　旨>

医療に対する社会のニーズに応えるべく、本学科において昨年度から看護実践能力の向上を目的に教育課程の改正を行なっている。現行教育課程について教員と学生の立場から内容分析を行った結果、学生の基礎学力の低下に加え、主体的学習力の不足等の問題があった。また、教員の教育力の不足という意見もみられた。教育課程上の問題として、本学科の教育目的、教育目標が明確にされておらず、また科目内容の重複や偏りが明らかとなった。それらを踏まえ、文部科学省下の検討会の指針等を参考にして、看護実践能力を高めるための教育課程の概念枠組みを検討した。教育目的は、『あらゆる場で高い倫理観を持ち、看護実践する能力を備えた人材を育成することにより，医療・保健・福祉の向上に貢献する』こととした。教育目標の主な要素として、「人間尊重と擁護」、「看護の計画的な展開能力」、「看護技術力」、「社会の変化に応じた看護の役割・機能の展望」、及び「能動的な問題解決能力」等を取り入れた。

キーワーズ：教育課程、教育目標、基礎教育、看護実践能力

欄外見出し：看護実践能力を高めるための看護学科教育課程における概念枠みの検討

Ⅰ、はじめに

本学看護学科の教育課程は、学科設置以降、1997年保健師助産師看護師養成所指定規則（以下、指定規則）の一部改正に伴い見直しが行われた。その後、2001年に行なわれた一部改正[1]では、ほぼ指定規則に従った教育課程であり、本学科の看護基礎教育に対する教育理念が明確ではなかった。

わが国では、1990年代から質の高い看護師を育成する目的で看護系大学が急増したものの一方では、大卒看護師の看護実践能力の低下が指摘されている。

21世紀に入り、少子高齢化の進展や医療事故の社会問題化など、看護職を取り巻く環境の変化及び市民の人権意識の高まり等により、医療に対する社会のニーズも複雑化･多様化してきた。対応策の一環として、2003年には看護師国家試験に必修問題が導入され、保健師・助産師・看護師国家試験の出題基準[2]が明示された。

また、近年、文部科学省下において調査研究[3,4]がなされ、大学における看護基礎教育内容の見直しが行われつつある。

そこで、これまでの社会の動きや医療に対するニーズの変化及び大卒看護師の看護実践能力の問題等を考えると、本学科においては、主体的かつ積極的に学習活動を行い、社会のニーズに対応できる専門的知識と看護実践能力を兼ね備えた学生の育成が急務であると考えた。

今回、看護実践能力を高める看護基礎教育のあり方について考察した上で、本学科の看護基礎教育に対する教育目的、教育目標を示し、看護職に必要とされる能力を習得できることを目指した教育課程を開発することを目的とした。現在、教育課程の概念枠組み構築の途上であることから、本報告では、現行教育課程の内容分析及び教育目的・目標の検討について経過報告を行なうこととする。

Ⅱ、現行の教育課程の内容分析

1、教員、学生による意見

*　西南女学院大学保健福祉学部　看護学科　助教授
**　西南女学院大学保健福祉学部　看護学科　講師

1）教員による意見

本学科教員による現行教育課程の問題点について、本学科ワーキンググループによる意見交換を行なった。その結果の概要は（表1）の通りである。

2）学生による意見

現行カリキュラムについて学生のニーズ調査を行なった。ほぼ全教育課程を修了した2003年度4年生88名のうち、無作為に選んだ学生19名を対象として、小グループディスカッションを1回実施した。また、2003年度3年生に対して、授業終了後、自由記載による意見を収集した。学生には、目的及びプライバシーの保護を説明し同意を得て行なった。

各学年の学生から得られた意見は次の通りであった（表2）。

2）現行の教育課程の主な問題点

本学科教員と学生の意見、及び他看護系大学の教育課程等を参考にして、カリキュラム検討委員2名で分析した現行教育課程についての主な問題点は、（表3）の通りである。

表1　現行教育課程についての教員の意見

教員に関する問題	授業計画	シラバスと実際の授業内容との不一致がみられる。
		教科科目間の関連性や連続性が見えにくい。
		学生数に見合う学習環境が整備されていない。
		学校行事に教育的意味づけが不明確である。
		教育方法が精選されていない。
	教員の資質	教育技術が未熟である。
		看護学の探求の不足（研究能力不足、教育評価能力不足、臨床実践能力不足、カリキュラムの仕組みの理解不足）がある。
学生に関する問題	学生気質	精神的に余裕がない。
		集中力に欠ける面がある。
		自己中心的(他人に興味がない、自己愛が強い)な傾向がある。
		社会的自立が十分ではない。
		精神力が弱い傾向がある。
		依存的である。
		自信がない。
	学生の学習能力及び学習態度	基礎学力にばらつきがある。
		職業倫理に欠けている。
		主体的学習ができない。
		クリティカルシンキングができない。
		学習を同時進行できない。
		学習を重ねても動機が高まらない。
	実習	グループダイナミックスが機能しない。
		看護技術が未熟である。
		知識と実践の統合ができない。
		看護提供者の立場にたてない。
		実習を系統的に学ぶことができない。
		実習における学習の整理ができない。
		患者のアセスメント能力が不足している。
		実習に伴い不安が増大する。

Table 1　Teachers' opinions about the present educational curriculum

表２　現行教育課程についての学生の意見

３年生	解剖学、生理学、栄養学などがどのように看護に生かされるのか理解できていなかった。紙上患者を用いての看護過程演習や実習が１年次に行なわれると、それらの科目の重要性が理解できたと思う。
	看護の基礎を学びつつ、疾患やその看護について学んだ方がわかりやすいと思うので、基礎看護学と成人看護学を並行して進めてもらいたい。
	２年生の後期に初めて実習を体験したが、実習の場に身を置いて初めて臨地の場の雰囲気や看護師という職業を具体的に描くことができ、その思いが今の学びに結びついている。その為にも実習は早い時期から多く取り入れた方が良い。
	実習での体験を通して、看護のあり方、患者のニーズについて理解が進んだので、看護理論の学習は実習の後からでも良い。
	１、２年次が時間的に余裕がある。３年次は一気に授業内容も濃くなり、自己学習の時間も必要となり、余裕がなくなるので考慮して欲しい。
４年生	各授業科目と看護との関係がわかりにくかった。
	1年次では解剖学、生理学は難しい。その時には必要性がわからなかった。
	解剖学と生理学を同じ授業内容にすると理解しやすいと思う(例　同じ時期に同じ臓器について授業する)。
	基礎看護学に解剖生理学を取り入れて欲しい。技術の根拠が理解できず、丸暗記していた。
	看護過程演習後の成果発表の時間を増やして欲しい。質疑応答しながら、担当していない事例についても成果発表の中で理解したいから。
	１年次からコミュニケーションを目的とした実習など、看護について考えるための動機づけとするため実習を早期から組み入れて欲しい。
	実習が詰め込みすぎで、自己学習の時間がとれない。記録物が多い。

Table 2　Student nurses' opinions　about the present educational curriculum

表３　現行教育課程の主な問題点

教育課程全体	保健福祉学部の教育理念はあるもののそれに基づいた看護学科の教育理念、教育目標が明確にされていない。教育課程もほぼ指定規則どおりで本学科の看護基礎教育についての考えが表明されていない。
	学年のレベル目標が明確にされていない。
	教育課程全体と科目との関連性や科目間の関連性が学生に理解されていない。
	本学科の卒業単位数が135単位であり、他看護系大学（私立看護大学130単位、私立S大学128単位、国立大学法人C大学127単位）と比較すると卒業単位数が多い。
	３年次前期に講義、演習が集中しており、１、２年次や実習終了後の4年次に授業のない時期がある。
	教育課程の改正後に教育課程全体の評価が行なわれていないことにより、教育課程全体の内容についての妥当性が検証されていない。
基礎専門科目	疾患に関する科目の単位数が比較的多い（医療概論、病理学、疾病治療概論、疾病治療各論Ⅰ、Ⅱの合計単位数16単位）ことから看護専門科目の授業内容が制限されている。
	人体、疾患に関する科目は充実しているものの心理学に関する科目が選択となっていることから看護の対象となる人間の捉え方が偏りやすくなる可能性がある。
	関連性の高い科目（生理学と解剖学）が単独で設けてあることから、双方の科目の特性を捉えたうえでの有機的な理解に困難が生じやすい。
看護専門科目	各科目で展開している看護技術の到達目標が明確にされていないため、基礎看護学技術及び臨床看護学技術の習得度が確認できない。
	基礎看護学、各臨床看護学及び地域看護学における看護過程演習の学習目標が連動していないこと、また看護過程演習で用いる看護理論にばらつきがあること等から、看護過程の本質の理解にも困難が生じている。
看護学実習	看護体験実習、基礎看護学実習、各臨床看護学実習及び地域看護学実習の目標が教育内容別にレベル目標として明確にしていないことから看護実践能力の習得の確認ができない。
	看護技術力が未熟である。
	実習進行上、３年後期で全ての実習が終了する学生もおり、就職するまでに1年以上実習がないため、看護実践能力を維持することが困難である。
学生に関する問題	自立度が低い。
	学習面に自信が無く、不安が強い。
	主体的に問題解決行動をとることができない。
	基礎的な国語力、計算力の低下により、看護実践に支障をきたすことがある。
教員に関する問題	教育力が不足（臨地経験、教育経験）している。
	教育評価能力(教育方法、教育技術）が不足している。
	研究能力が不足している。
	教育能力を向上させるプログラムが充実していない。

Table 3　The main problems of the present educational curriculum

新教育課程の編成

1．看護教育界の現状

1991年までは遅々として進まなかった看護教育の大学化も1992年の「看護師等の人材確保の促進に関する法律」の施行により、看護系大学数は急激に増加し、2004年度は119校[5]となった。

看護教育の大学化が進行する一方で、大卒看護師の実践能力に対して厳しい評価もある。2003年の研究報告の中に、大卒看護師を受け入れている施設（調査対象：関東1都6県300床以上の病院および国立・公立・私立大学附属病院計381施設の看護師長、回収率47.5%、稼動病床数平均：568.2床、看護系大卒者との勤務経験者74.0%、看護系大卒者の管理経験61.3%）の看護師長が捉えた大卒看護師の資質上の特徴として、良い点は、「レポート作成や看護研究がある程度自立して行なえる」(65.7%)、「論理的思考力が優れている」(56.7%)、「自己学習力が優れている」(54.5%)、悪い点は、「周囲に援助を求めない、求められない」(23.1%)、「自分ができないことを認めたがらない」(20.1%)、「エリート意識が高い」(11.9%)、実践上の特徴としては、「他卒者と変わりない」(59.0%)、「劣る」(30.6%)、「優れている」(6.7%)[6]、また、他卒者と比較して、就職当初に劣っているとした能力は「技術力」(92.7%)、「患者とのコミュニケーション力」(46.3%)、「態度」(31.7%)、とあった。一方、大卒看護師自身が就職後感じている困難の特徴として、「看護技術に関する困難：テクニカルスキル（特に点滴・注射、緊急時の対応等)、アセスメント、コミュニケーション」「仕事の流れに関する困難：先輩から指導を受ける上での困難」[7]があった。

これらの結果からは、大卒看護師を受け入れている看護師長と大卒看護師自身の双方による看護実践能力の評価として、大卒看護師が、就職当初において、看護実践能力の基礎となる「コミュニケーション」、看護実践の展開には欠くことのできない「アセスメント」、また直接患者に影響をおよぼし、看護の質を左右する「看護技術」などの能力は低い、といえる。

このような大卒看護師の看護実践状況の中で、2000年に「看護学教育のあり方に関する検討会(一次検討会)」(以下、あり方検討会）が発足した。検討会の目的は、真に国民のニーズに対応すべく、看護基礎教育における看護学教育の在り方を検討することであった。2001年3月には、「大学における看護実践能力の育成の充実に向けて」として、指針が提示された。その報告書によると、看護実践の質向上のための人材育成として、特に、看護実践能力の育成に焦点をあて、技術学習項目の検討、臨地実習指導体制、教育の質の向上と改善等について検討がなされた。その中の一つである看護実践を支える技術学習項目は、人間を対象として活動するための基盤である「看護ケア基盤形成の方法」と、看護実践に必要不可欠な技術内容である「看護基本技術」の二つに分けて整理された。「看護ケア基盤形成の方法」には、1、看護の展開方法、2、療養生活支援の方法、3、人間尊重・擁護の方法、4、援助的人間形成の方法、5、健康に関する学習支援の方法、6、健康管理支援の方法、7、チームワークの基本とマネジメント方法、8、成長発達各期の支援方法、が構成された。また、各項目には、具体的学習内容も一覧で明示された。「看護基本技術」は、1、環境調整技術、2、食事援助技術、3、排泄援助技術、4、活動・休息援助技術、5、清潔・衣生活援助技術、6、呼吸・循環を整える技術、7、創傷管理技術、8、与薬の技術、9、救命救急処置技術、10、症状・生体機能管理技術、11、感染予防の技術、12、安全管理の技術、13、安楽確保の技術[8]であり、これらの技術項目についても、その学習を支える知識と具体的技術内容が明示された。この検討会報告において、看護学教育における学士課程のコア教育内容の一つが提示されたことになる。

さらに、第一次検討会に引き続き、第二次検討会が発足した。第二次検討会の目的は、1、学士課程における看護学教育の特質、2、卒業時までに達成すべき看護実践能力の到達目標、3、卒業時の到達目標達成度の評価方法を明確にすることであった。2003年3月には「看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標」が発表され、到達目標として5群、19項目が提示された。

Ⅰ群：ヒューマンケアの基本に関する実践能力（1、人の尊厳の重視と人権の擁護を基本に据えた援助行動　2、利用者の意思決定を支える援助　3、多様な年代や立場の人との援助的人間関係の形成）Ⅱ群：看護の計画的な展開能力（4、看護の計画立案・実施・評価の展開、5、人の成長発達段階・健康レベルの看護アセスメント　6、生活共同体における健康生活の看護アセスメント　7、看護の基本技術の適格な実施　Ⅲ群：特定の健康問題を持つ人への実践能力（8、健康の保持増進と健康障害の予防に向けた支援　9、次代を育むための援助　10、慢性的疾患を持つ人への療

養生活支援　11、治療過程・回復過程にある人への援助　12、健康の危機的状況にある人への援助　13、高齢期にある人への健康生活の援助課題の判断と支援　14、終末期にある人への援助）　Ⅳ群：ケア環境とチーム体制整備能力（15、地域ケア体制の充実に向けた看護の機能　16、看護職チーム・保健・医療・福祉チームでの協働・連携　17、ヘルスケア提供組織の中での看護の展開）　Ⅴ群：実践の中で研鑽する基本能力（18、看護実践充実にかかわる研究成果の収集と実践への応用　19、看護実践を重ねる過程で専門性を深める方法の修得）[9]、であった。

看護職者数の概要をみると、他国の看護師数が、人口1万人に対し、アメリカ83.3人、カナダ99.9人、イギリス87.8人、デンマーク94.3人である。それに対し、日本は、60.5人である[10]。医療・保健・福祉の先進諸国と比較すると、まだわが国の看護師数は少ないといえる。しかしながら、わが国の2000年の看護職者数は、看護師約70万人、保健師約4.3万人、助産師約2.5万人[11]であり、看護師は、この40年間で約7倍に増加している。1999年4月の全養成機関卒業者のうち、大卒看護師の占める割合は9.7%、2003年4月は大卒看護師14.7%[12]であった。以上のように、大卒看護師が増加する中で、あり方検討会の指針が示されたことになる。

あり方検討会による2回にわたる看護基礎教育についての指針が提示される以前のわが国における教育課程の作成の大半は、指定規則に基づいていた。今回の報告において、教育課程の教育内容、特に看護実践能力の到達目標が明確にされた。今後の教育課程の構築は、指定規則に基づいた上で、これらの指針を参考にして、教育課程の見直しが行われることになるだろう。その結果、わが国の看護系大学における看護基礎教育は、より充実してくることが予測される。

2．教育目的と教育目標の概要

現行教育課程の主な問題点の改善を目的に、あり方検討会報告書、看護系大学の教育課程の先行研究[13-18]、及び看護基礎教育研究者の見解[19-23]等を参考にして、教育目的および教育目標を立案した。

本学科の教育目的として、現在の本学の教育理念である「キリスト教の愛の精神に基づく心の教育によって、豊かな人間性を育成する人間教育の実践」に基づき、「看護職を取り巻く社会が常に変化していることを認識し、あらゆる場で、高い倫理観をもち、看護を実践する能力を備え、医療・保健・福祉の向上に貢献できる人材を育成すること」とした。

次に、教育目的を達成するための教育目標6項目について述べる。

「1、キリスト教精神を基盤とし、常に人間を尊重し、尊厳をもって接するための知識、技術及び態度を備えた学生を育成する。」

あり方検討会においては、看護ケアの基盤として、「人間尊重・擁護」を取り上げ、卒業時到達目標Ⅰ群の中で「人の尊厳の重視と人権の擁護を基本に据えた援助行動がとれる」と提示された。看護は、対象となる人の立場にたち、対象となる人の思いや痛み等を共感しようとすることから始まるが、本学科の学生の特徴として、自己愛が強く、他人に対する興味がない、といった意見もあった。さらに、現在の医療技術の進歩や、入院期間の短縮化の進行により看護職者と患者が関わる時間が減少し、関係性が希薄になることも考えられる。よって、今後は、限られた時間の中で、対象となる人と看護職者が人と人として関わること及び対象となる人の人としての権利を尊重することができる能力が求められてくる、と考えられる。この教育目標に掲げた能力は、即座に育成できるものではなく、入学時から卒業時まで一貫して教育することが求められる。段階を踏んだ教育レベル目標を設定し、各段階において達成度を評価したうえで教育過程を進行させる必要がある。

「2、多くの側面をもち、環境と相互作用する人間を全体的に理解し、自ら考える力、関わる力を育成する。」

看護の対象である人間は、多くの機能を備えている。また、誕生の瞬間から死に至るまでには、環境と作用しあいながら、成長発達している。そして、その過程において、健康状態が変化することもある。そこで、これらのことを踏まえ、看護の対象としての人間を全体的に理解する能力を育成する必要がある。

また、看護は、健康という観点から対象である個人・家族・地域をみつめ、常に対象との人間関係を形成した上で実践される。さらに、看護を展開する過程においては、問題解決思考及び批判的・論理的思考等を用いる。そこで、看護実践の基礎的能力として、人間と関わる能力及び自ら考える能力等を育成することが求められる。

「3、あらゆる健康状態の個人・家族・地域の人々に対し、関係を築きながら、専門的知識と技術及び態度をもって看護を実践する能力を育成する。」

あり方検討会の卒業時到達目標Ⅱ・Ⅲ群に相当する教育目標である。

看護は、対象となる個人・家族・地域の人々へ、看護実践を通して成立している。さらに、看護実践能力の育成の教育内容は幅広い。看護を実践するには、まず対象となる個人・家族・地域の人々と関わりながら、看護上の問題を適格に捉えなければならない。そのためには、対象となる個人・家族・地域の人々を理解するための専門基礎知識から対象に応じた看護方法までの専門的知識が必要となる。さらに、看護過程展開能力、及びその一環である看護技術を患者の安全・安楽を考えながら実施する能力は必須といえる。一方では、本学科の学生の問題である多くの知識を統合する力の不足、人間関係形成能力及び看護技術能力の不足、さらに就職後に看護技術力に問題を感じている大卒看護師と看護師長の意見もあった。以上の学生の特性を踏まえたうえで、高い看護実践能力を育成していかなければならない。この看護展開能力及び看護技術能力の育成についても、4年間の教育レベル目標を立て、各段階において習得度を評価しつつ進行させることが必要である。

「4、保健・医療・福祉の総合的な視野をもって、看護の対象となる人々や関係専門職と協力・協働する能力を育成する。」

あり方検討会の卒業時到達目標Ⅳ群に相当する教育目標である。

高齢化の進行や疾病構造の変化、入院期間の短縮及び介護保険制度の導入等により、現在は、地域において、保健師及び看護師による活動が幅広く行なわれている。その活動を行なうためには、地域ケア体制の中で、他職種と協働・連携していくための知識・技術、連携のための社会資源と制度についての知識、地域の中での看護活動の技術及びヘルスケア提供組織の中での看護展開についての知識・技術等を育成する必要がある。

「5、グローバルな視点から、保健・医療・福祉領域の動向と課題を知り、看護の役割、機能を展望し、社会貢献する能力の基礎を育成する。」

グローバル化の進行により、物質や情報及び人の移動や交流が、地球規模で行なわれるようになった。それらの交流が活発になるにつれて、国内外の看護職の役割・機能が拡大することが予想される。そこで、国際社会の動きとそれに伴う日本社会の動きに常に注目し、世界の中での日本の立場や状況を理解する能力、及び社会の動きに伴う看護職の立場、役割の認識及び必要なコミュニケーション手段等を思考する能力の育成が必要となる。

「6、看護職という専門職に従事するものとして、生涯学習する存在であることを自覚し、看護の質の向上を常に考え、行動できる力を育成する。」

あり方検討会の卒業時到達目標Ⅴ群に相当する教育目標である。

専門職は、高度に体系化された専門的知識・技術をもち、それらを基礎とするサービスをクライアントの要請に応えて独占的に提供する職業[13]であることから、環境の変化や社会のニーズに対応するためには、生涯学習し、看護に必要な能力を開発する責務がある。

そして、専門職としての自覚をもち、看護の質を向上させるには、看護実践したことを自ら振り返り、問題解決する能力が求められる。学生の問題として、基礎学力の低下、主体的な学習が不得手及びクリティカルシンキングができない等があった。能動的に問題解決する能力を育成するには、1年次からこれらの能力を育成する科目を設置し、教育課程を構成する必要がある。また4年間継続して、この能力を育成できるように各学科目を通して常に強調していきたい、と考えている。

Ⅳ. おわりに

本学科カリキュラム委員による教育課程の構築は、今回提案した教育目的、教育目標を踏まえて、教育課程の概念枠組み作成の最終段階にある。本学科の現行教育課程を分析している段階において、文部科学省から、大学における看護基礎教育の指針が提示された。現在、新教育課程の教育内容の充実に向けて、この報告を参考にしながら検討しているところである。

今後のカリキュラム委員の活動としては、教育課程の概念枠組みを完成させ、全学科目を明確にすること、及び、各教育目標を達成すべく段階的な教育レベル目標を立て、各教育レベルに応じた科目を配置することである。

看護基礎教育においては、看護学実習の充実が、看護実践能力に大きく影響することはいうまでもない。現在、1年次前期に看護体験実習を実施して3年目となる。入学時に夢をもって描いていた看護師像が、入学後、数ヶ月の間に薄れてきている学生もいた。しかし、看護体験実習において、看護職者や病気を持って生活している人々に関わることにより、再び将来の看護師像を確認したり、これまでの自身の学習不足を実感するなど、教育成果はみられてきている。この学生の変化は、適切な時期にレベルに応じた実習の設定の

重要性を証明している、といえる。また、看護系大学の中には、4年間の学習を総括する目的で4年次に総合看護学実習を実施しているところもある。4年次は、就職活動、国家試験準備など、学生にとっては緊張と時間的制約を強いられる時期である。しかし、就職後に看護実践能力の乏しさを指摘されていることを考えると、4年次における総括の実習は、看護基礎教育における看護実践能力の最終確認の場であり、就職後に看護実践を円滑に進行するための能力を得る場にもなりうる。また、学生がこの実習の中から研究テーマを見いだし、取り組むことにより将来にわたる看護を展望したり、自分の行なった看護を通して看護観の形成も促されることが期待される。以上のことより、1年次における看護体験実習から4年次の総括の実習までの看護学実習の配置と各看護学実習の科目目標についての段階的な設定についての検討が必要である。

新教育課程開始までの準備過程においては、教員の教育力の強化も課題であろう。新教育課程について、全教員が教育目的、教育目標および教育内容を共有すること、また、教員間の教育課程全体への理解と担当科目に関しての自主的な努力はもちろんであるが、大学による教員の教育力を向上するためのシステムも必要であると考える。

付記

本研究の一部は2003年度西南女学院大学共同研究費の助成を得て行われた。

引用・参考文献

1）看護行政研究会監修：平成15年版　看護六法、新日本法規、p.315.
2）看護問題研究会編集：保健師・助産師・看護師国家試験出題基準　平成15年版、医学書院、2003.
3）文部科学省編：看護学教育の在り方に関する検討会報告会資料. 2002. 3.
4）文部科学省編：看護学教育の在り方に関する検討会報告会資料. 2004. 3.
5）齋藤訓子：看護実践能力に関する文部科学省および厚生労働省の2つの報告書について、看護、56(9)、30-31、2004.
6）酒井郁子、湯浅美千代、佐藤まゆみ他：看護系大卒者の特徴と育成・活用に関する看護師長の認識、看護管理、13(7)、517-522、2003.
7）山田多香子：看護系大学を卒業した新人看護師の看護実践上の困難状況と学習ニーズ、看護管理、13(7)、533-539、2003.
8）前掲書3、pp.1-17
9）前掲書4、pp.1-28
10）日本看護協会出版会編：平成16年版看護白書、p.204、日本看護協会出版会.
11）前掲書10、p.185
12）前掲書10、p.190
13）田島桂子：次代の看護を拓く看護職者の教育、日本看護研究学会雑誌、23(1)、13-23、2000.
14）平山朝子：学士課程カリキュラムの開発4、岐阜県立看護大学の場合1、教育課程編成の考え方と特色、Quality Nursing 9(6)、81-86、2003.
15）小幡光子：学士課程カリキュラムの開発7、大分医科大学看護学科の場合1、カリキュラム改正の背景と経過-教員の組織化と参加-、Quality Nursing 9(9)、57-61、2003.
16）江本愛子：アセスメント能力の育成の視点からみた看護基礎教育のカリキュラムの現状と課題、Quality Nursing 4(9)、12-18、1998.
17）坪倉繁美、林幸子、衣川さえ子他：看護基礎教育における看護・医療事故予防にかかわるカリキュラム構築2、看護展望、27(3)、96-103、2002.
18）Marcia A. Petrini：看護学教育の指針となるもの To Pave the Road for Tomorro's Nursing Education 4、カリキュラム目標と達成目標、Quality Nursing 7(9)、73-82、2001.
19）小山眞理子編：看護教育のカリキュラム、医学書院、2000.
20）小山眞理子編：看護教育の原理と歴史、医学書院、2003.
21）杉森みど里：看護教育学第3版、p.6、医学書院、1999.
22）田島桂子：看護実践能力育成に向けた教育の基礎、医学書院、2002.
23）舟島なをみ、杉森みど里：看護学教育評価論、文光堂、2000.
24）前掲書21、p.6.

Consideration of a Conceptual Framework for the Education Curriculum in the Nursing Department to Help the Students Have Enhanced Practical Nursing Skills (Part 1)

Nariko Chuman*, Akiko Fukahara**

<Abstract>

In order to respond to the social needs for medical service, our department has been working on reform of the education curriculum since the last academic year to improve the practical nursing skills of the students. The contents of the current curriculum were analyzed from the standpoints of the faculty and students. The results revealed a lack of proactive learning in students in addition to a decline in their basic academic proficiency. There also were opinions claiming the teachers' lack of teaching skills. On the issues of the curriculum, it was clearly indicated that the educational purpose and goals of this department were not defined and there were overlapping as well as imbalanced contents between subjects. We considered the conceptual framework of education curriculum to design it to enhance students' practical nursing abilities, based on these findings and in reference to the guidelines presented by the commission under the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology. We defined the educational purpose of our department as "to contribute to the improvement of medical, health care and welfare service through development of human resources having practical nursing skills with a high level of ethics in all aspects." Major elements we adopted as our educational goals include "respect for dignity of human being and protection of their rights," "capability to systematically develop nursing care," "nursing technique," "prospects regarding the roles and functions of nursing profession in accordance with social changes," and "abilities to actively solve problems."

Keywords: Education curriculum, educational goals, fundamental education, practical nursing skills

Running title:Consideration of a conceptual framework for the education curriculum in the nursing department to help the students have enhanced practical nursing skills

* Associate Professor in the Oepartment of Nursing,Faculty of Health and Welfare,Seinan Jo Gakuin Uninersity
** Lecturer in the Department of Nursing, Faculty of Health and Welfare,Seinan Jo Gakuin Uninersity